

報告番号	※甲	第	号
------	----	---	---

主論文の要旨

論文題目 改訂道徳的感受性質問紙日本語版の看護学生版の開発

氏名 滝沢美世志

論文内容の要旨

緒言

専門職としての質の高い看護を実践するには、看護師自身の道徳的感受性が不可欠であり (Fry ら, 2008)、道徳的感受性は看護師だけでなく看護学生にとっても重要である。私たちは先行研究において改訂道徳的感受性質問紙日本語版の看護学生版第 1 版 (滝沢&太田, 2015) の作成を進めてきたが、まだ完成には至っていない。そこで、今回さらなる改良を加え、信頼性、妥当性のある尺度へと完成させることを目的として研究を進めた。

本研究の構成

本研究の研究デザインは 2 段階で構成され、第 1 段階についてはフォーカスグループインタビューによる半構造化面接法、第 2 段階は自記式質問紙調査法により行うものとした。

1. 第 1 段階：改訂道徳的感受性質問紙日本語版の看護学生版 (MSQ-ST) の準備

J-MSQ に基づいて、次の 4 つの方針 ; 1. J-MSQ の 1 つ 1 つの質問文で問われている意味内容を保ち、2. 臨床場面を看護学生でも理解できる臨床実習場面に置き換え、3. 看護学生でも理解できるように、質問文の表現を単純化し、4. J-MSQ の 1 つの質問文に対して、看護学生が明確に理解できるような文章表現やキーワードを変えてバリエーションを加えた質問文を複数追加すること、に基づいて、先行研究の第 1 版の質問文を修正した。

これを用いて、表面妥当性を確認するために、便宜的に抽出した 1 校の看護専門学校に在籍する 2 年生 6 名、および 3 年生 7 名の 2 つのグループを対象としたフォーカスグループインタビューを実施した。

その結果として、13 項目からなる質問紙を作成した。次に、この質問紙を用いて 2015 年に 4 校の看護専門学校 1~3 年生と 3 校の看護大学の看護学生 1~4 年生の 354 名を対象として質問紙調査を実施した。探索的因子分析 (有効回答率 98.6%) の結果、Lützén ら (2006)、および前田ら (2012) と同じ 3 つの因子を抽出することができなかった。そのため、上記の 4 つの方針に基づいて再度必要な修正を行い、合計 24 項目の質問紙を準備した。その後便宜的に抽出した別の 1 校の看護専門学校に在籍する 2 年生 7 名、および 3 年生 7 名の 2 つのグループを対象としたフォーカスグループインタビューを実施し、最終的に 24 項目からなる質問紙を準備した。

2. 第2段階：質問紙調査

1) 対象

質問紙調査の対象は、4年課程の看護大学3校の1～4年生、および3年課程の看護専門学校8校に在籍する看護学生1～3年生の合計1,995名を対象（編入生を除く）とした。

2) 調査期間

2016年11月～12月とした。

3) 調査内容

質問紙調査の内容は、①主な属性として教育課程、学年、性別、経験した臨地実習などの回答者の特性、②24項目の質問文、③基準関連妥当性の検討のための森ら（2002）の大学生のレジリエンス測定尺度とした。

4) 分析方法

統計学的分析には、IBM SPSS Statistics Ver.24.0 for Windows、およびIBM SPSS Amos Ver.24.0を用いた。

結果

1. 参加者

看護学生480名から回答を得た（回収率24.1%、有効回答率98.5%）。看護大学生181名（38.3%）、看護専門学校生292名（61.7%）であった。

2. 探索的因子分析の結果

探索的因子分析は、最尤法（プロマックス回転）により行い、固有値1以上を基準とした。また、因子負荷量が0.40以上、かつ2重負荷のない項目を採用した。その結果、前田ら（2012）のJ-MSQ、およびLütznら（2006）のr-MSQと同じ3因子構造が抽出された。また、高学年、および低学年の2郡に分けて因子構造が再現できるかを確認した。高学年においては、看護大学、および看護専門学校ともに、今回得られた結果と全く同様の下位項目：「道徳的強さ」「道徳的な気づき」「道徳的責任感」で構成される3因子を再現できた。一方で、看護大学における低学年の結果は、「道徳的強さ」、および「道徳的な気づき」の因子についてはは確実に抽出することができたが、「道徳的責任感」は、適切に抽出されなかった。また、看護専門学校の低学年の結果は、3因子をほぼ再現することができた。

3. 外的基準（大学生のレジリエンス測定尺度）との相関

大学生のレジリエンス測定尺度の合計スコアと「道徳的強さ」の合計スコアについてPearsonの積率相関係数を算出した結果、相関係数は、 $r=0.46$ ($p<0.01$)であった。

4. 内容妥当性分析

9人の専門家のうち7人から内容の同一性が確保されているという評価が得られ、適切な内容妥当性（CVI=0.78）（Lynn, 1986）が確認された。

5. 検証的因子分析によるモデル適合度分析

検証的因子分析によるモデル適合度の検討を行った。その結果、適合度指標 Incremental fit index (IFI) =0.91、Comparative fit index (CFI) =0.91、Root mean square error of approximation (RMSEA) =0.08であった。

6. 信頼性

因子分析結果による11項目の尺度全体の信頼性係数（Cronbach's α ）は、 $\alpha=0.62$ であり、それぞれの因子の信頼性係数（Cronbach's α ）については「道徳的な気づき」 $\alpha=0.75$ 、「道徳的強さ」 $\alpha=0.76$ 、「道徳的責任感」 $\alpha=0.44$ であった。

7. 属性による道徳的感受性の差

看護大学と看護専門学校別の学年、および性別による道徳的感受性の差について検討した。その結果、「道徳的強さ」について、看護大学3年生が1,2,4年生より有意に高く ($F(3,156) = 5.46, p = 0.001$)、看護専門学校3年生が2年生より有意に高かった ($F(2,240) = 3.10, p = 0.047$)。なお、性別による道徳的感受性のスコアの差はみられなかった。

また、学生毎に実習の進行が異なる看護大学3年生について、特定の臨地実習の経験の有無による違いについて比較した。その結果、「道徳的責任感」について、小児看護学実習を経験した看護学生は経験していない学生よりスコアが有意に高かった ($t = -2.255, df = 54, p = 0.028$)。

考察

1. 看護学生の道徳的感受性を構成する因子

看護学生用のMSQ-STについて、看護師用のJ-MSQと同じ3因子を対象者全体の因子分析結果から示すことができた。これは、看護学生の道徳的感受性も看護師と同じ3つの概念から構成されることを示すものである。また、この3つの概念の発達段階について、今回、高学年と低学年の2群に分けて検討した結果、看護大学、および看護専門学校における高学年の学生は、3因子とそれに含まれる項目が全く同じ結果を再現することができた。しかし、低学年の学生は、「道徳的責任感」が1つの独立した因子として抽出されていないことから、低学年の段階ではまだ道徳的感受性のうちの「道徳的責任感」が確立されておらず、学年が進み高学年になってやっと確立するものと考えられる。これは、Kohlberg (1969) が示す道徳的発達のプロセスを反映していると考えられる。一方で、「道徳的強さ」と「道徳的な気づき」は、低学年から確立されており、低学年でも抽出可能であり、それらについては本質問紙を用いれば低学年から継続的に測定・比較可能であることが示された。

2. 質問紙の妥当性と信頼性

今回実施した探索的因子分析の結果、Lütznéら (2006)、および前田ら (2012)の示す道徳的感受性と同じ3因子構造；「道徳的強さ」、「道徳的な気づき」、「道徳的責任感」であることが確認された。

道徳的感受性を構成する1つの概念である「道徳的強さ」と大学生のレジリエンス測定尺度 (森ら, 2002) との有意な正の相関 ($r = 0.46, p < 0.01$) を示した結果は、今回の質問紙の基準関連妥当性が支持されたことを示す。内容妥当性について、Lynn (1986) の内容妥当性の定量化の方法に基づいて、CVI=0.72を算出した。Lynn (1986) は、CVI=0.7を上回る場合内容妥当性が支持されることを示している。そのため、今回の質問紙の内容妥当性は支持された。

確証的因子分析 (Hairら, 2006) により、モデル妥当性は十分な適合度を示した (IFI = 0.91, CFI = 0.91, and RMSEA = 0.08)。これらより、質問紙の十分なモデル適合度が示された。

一方で、質問紙全体、および「道徳的責任感」の信頼性係数 (Cronbach α) はそれぞれ 0.62、0.44 であり、内部整合性についてはまだ不十分であることが示された (Devellis, 2012; Nunnally, 1978)。今後さらに質問紙を修正する必要がある。

3. 道徳的感受性の性別と学年による差

道徳的感受性について性別による差がないことが示され、これは Lütznéら (1995) の先行研究の結果と一致している。

「道徳的強さ」について、看護大学生、および看護専門学校生の3年生のスコアが他の学年

と比較して有意に高いことが示された。これは、実習の経験を積み重ねるとともに倫理的な問題をより認識できるようになることを示した先行研究（Kim ら, 2004 ; 金澤, 2008 ; 坂上ら, 2009）と一致している。調査時期として、看護大学の3年生は、臨地実習の真っ最中であり、看護専門学校の最高学年である3年生もまた最後の臨地実習の進行中、もしくはすべての臨地実習を終了したばかりであった。臨地実習中は、臨地の環境で患者に対するより良いケアを通して道徳的感受性が向上するよい機会である。

看護大学の3年生の「道徳的責任感」について、9領域の実習のうち小児看護学実習の経験の有無だけに有意な差が示された。しかし、その他の実習において経験の有無による差が示されなかったことは、個別の実習経験が学生の道徳的感受性に大きな影響を与える可能性が少ないことを示唆すると考える。

結論

MSQ-STは、3因子11項目で構成され、看護学生の道徳的感受性を測定するためにある程度の信頼性と妥当性を有するものとして開発することができた。看護学生の道徳的感受性のうち「道徳的強さ」と「道徳的な気づき」については、低学年のうちからほぼ形成され、継続的に測定可能であることを示した。本研究において開発されたMSQ-STは、看護学生の学年間の道徳的感受性の差、傾向を測定可能なことを示すものであり、看護学生の道徳観の涵養のための教育の評価などに活用できるものである。